

教育の今日的な課題と授業分析 一個と集団との関わり、生き方の教育を例として一

1 授業における個と集団の関わり

1. 1 授業をめぐる今日的な変化

- 授業の前提の問い直し
 - ・ 授業の基盤としての"学級"・"学校"
 - ・ 教師と子どもの関係
 - ・ 子どもと子どもの関係
- 学級経営・授業運営の困難さ
 - ・ 学級経営の前提が崩れやすくなった
 - ・ 多様な子ども
 - ・ 学校の価値観のゆらぎ
- 情報通信技術(ICT)がもたらすもの
 - ・ 教育方法・学習環境へのICT
 - 学習の個別化
 - 協同学習
 - ・ ICTによる学習内容の変化
 - 実践的なコミュニケーション
 - ICTを活用した問題解決
 - 情報の科学的理解
 - 情報モラル、情報倫理教育
 - ・ 学校の役割そのものに対する問題提起

- インターネット
 - ・ いつでも、どこでも、だれでも、
 - ↓
 - ・ そこに、そのとき、いることの意味が低下
- リソースの視点からみた、学校の相対的な低下
 - ・ 地域の中で、学校に行かなければなかったもの。学校ならでは。
 - ↓
 - ・ 周りに高いビルが林立したため、相対的に目立たなくなった、古めの建物
- 現在進行中のさまざまな変化
 - ・ 大きくとらえると、個を基盤とする
 - ・ ただし、一見、個を大切にする教育が、
 - ・ 実は、関係性の断絶と、少数の尺度による競争

1. 2 授業分析の意義

- 学校の存在理由を問う
 - ・ 学校がもしなかったら、今から作ろうとするか？
 - ・ 現実的な問いではなくても、問うことに意味
- 授業分析の意義
 - ・ 集団で学ぶことの意味を改めて明らかにする
 - ・ 学校でしか学べないことを理念でなく、データで語る。
- データとして知見を出す
 - ・ 究極的には、予算獲得の根拠となるデータが示しうるか！
 - ・ 授業のコストに見合っているか？
 - ・ 学校の運営、人的、物的リソース
 - ・ コストは、お金だけではない
 - ・ 家庭から子どもを引き離す学校
 - ・ 長い間子どもを囲い込む
 - ・ 窮屈な人間関係

第1章

研究の目的

第1章 第1節

授業分析の今日的課題

授業はコミュニケーションの過程としてとらえられることが多い。授業に関する研究の多くも、コミュニケーションを媒介とする学習を前提としてきた。

しかし、現在（そして近い将来）の学校内外の状況の変化によって、従来の前提条件が大きくゆれ動きつつある。たとえば、「学級崩壊」という言葉に代表されるように、授業の基盤である学級内でのコミュニケーション自体が成り立たない状況が生じてきている。

いっぽうで、情報通信技術の発展・普及によって、コミュニケーションの範囲が広がり、教室外の世界の人々やリソースと学習者が直接的に情報をやりとりできる環境が整備されつつある。このことは閉じられた学級を開いていく点で期待できるが、これまでの学校教育が前提としてきた学級という枠組みに必然的な変化をもたらすものでもある。

学級内のコミュニケーションを基礎とした授業の研究も、こうした状況の変化と無関係ではない。変化の時期にあるからこそ、学級内のコミュニケーションを基盤とする授業のメカニズムを、授業分析を通して、改めて具体的な諸事実（データ）にもとづいて明らかにしていくことが必要である。「学級内のコミュニケーションをどのように立て直すか」、「開かれた教室での学級内のコミュニケーションのあり方はどのようなものか」、またより大きな問題として「学級内での集団思考が成立するような授業は、もはやこれからの学校教育では目指す必要はないのかどうか」など、変化によってもたらされる新しい問題に対し、議論の素地になるべき基礎的知見を提供することが授業分析に求められる。

このように今日的にみて、授業分析の役割と課題はきわめて大きいといえる。

本研究における授業分析では、子どもどうしの話し合いの中でお互いに自分の考えを出し合いながら集団で思考を深めていく授業が、いかなる要因およびその関連によって実現しているのかを明らかにすることを目指す。すなわち、そのような授業の展開過程を支えている、子どもの思考（およびその発展）、子ども相互の関わり、授業者の関与など、授業における話し合いの成立要因を、具体的な諸事実（データ）と結び付け、研究的に蓄積可能な知見として示すということである。

柴田好章（2002）「授業分析における量的手法と質的手法の統合に関する研究」

2 生き方の教育

2.1 中等教育の課題

○キーワード

PISA調査

学習時間の調査

学ぶ意欲の減退・喪失 学ぶことの意味の希薄化

中高連携 （高大連携 中高大連携）

○ PISA2003より

・ 通常の授業以外の宿題や自分の勉強をする時間について、わが国の生徒は過当たり平均6.5時間で、OECD平均の8.9時間より短い。また、数学の宿題や自分の勉強をする時間については、わが国の生徒は過当たり平均2.4時間で、OECD平均の3.1時間より短い。

・ 数学的リテラシーの分散（ばらつき程度）と学校間分散割合について、わが国は、生徒全体の数学的リテラシーの格差が大きく、学校間の格差も大きい。一方、フィンランドは生徒全体の数学的リテラシーが高い得点範囲に集中して分布しており、学校間格差はあまり見られない。

○ "受験"のインセンティブ

受験（あるいは資格）のインセンティブ ← 得る物が多い 失う物が多い
競争 激化→参入減少→二極化→

→（次にくるのは） 離れる自由 は 不自由

→ 対立・社会不安

○ 成長モデルの終焉

早く出発する列車に乗ると、かなり遠くまで到達できる。

1本でも早い列車に乗ろうと、殺到する。

早い列車に乗れなくても、それなりに遠くまで行けた。

↓

早い列車ほど遠くまでいけることには変わらない。

ただし、駅を出たとたんに、列車は渋滞。
早く乗っても、遅く乗っても、それほど変わらない。
いずれにせよ、それほど遠くまで行けるわけでもない。

★ 生きにくい現代を生きている子どもや若者

先行きが不透明であり、それによってもたらされる将来への漠然とした不安が支配する。こうした重苦しい雰囲気の中で、本音での人との関わりをさげ、居場所をさがしてさまよう姿。かといって絶望的な状況にあるわけではなく、幸い(?)切迫した生活上の課題(端的に言えば、明日の衣食の心配)もなく、必死になって今日を生き抜こうという活気もみられない。

2. 2 キャリア教育

○ フリーターやニート、早期離職率の増加など、働くことを通した社会参加の様に大きな変容

○ キャリア教育が求められる背景 協力者会議

①経済のグローバル化の進展、コスト削減、経営の合理化、雇用形態等の変化、求人への著しい減少、求職と求人の不適合の拡大。

②若者の勤労観、職業観の未熟さ、職業人としての基礎的資質・能力の低下等。

③精神的・社会的自立の遅れ、人間関係を築くことができない、進路を選ぼうとしないなど、子どもたちの成長・発達上の課題。

④高学歴社会におけるモラトリアム傾向。進学も就職もしようとしなかったり、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加。

職業教育、進路指導 → 生き方の教育へ

2. 3 子どもの可能性

○ 子どもたちの豊かな可能性 協力者会議

○ 自分の生き方について、自分が生きる舞台となる日本や世界や地球のあり方について考えようとする子どもたち (田中孝彦)

★生き方への関心を高める教育

「生き方への関心」が無ということもあり得ない
また外部からこれを注ぎ込むこともできない。

事象や人々と関わり、切実な問題として追究する中で、自らの生き方への関心も、自ずと高まっていくのである。つまり、今ここでこれを追究せずにいられない自己に出会うことによって、自分は何をしたいのか、何をすべきなのか、どう生きたらよいかを考えることができるのである。

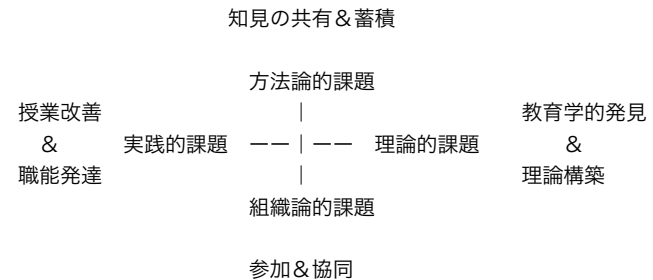
→問題解決学習

- ・ 教科教育のあり方
- ・ 総合的な学習の時間のあり方

2. 4 子どもの可能性を見いだす授業分析の可能性

★ その子とその子らしく生きること、学校で学んでいることを切り離さず、ぎりぎりまでそのつながりを求めていこうとすることを大切にするためには、真に深い子ども理解が欠かせない。ここに、授業分析に大きな可能性を見いだせる。抽出児童・生徒に、教師が願いをかけ、学習の中でどう変化があるのかを、徹底的に資料に基づいて追究する。そうした中から、その子にとっての本当の願いや、発達の方向性や可能性が明らかになる。

★ 授業分析に何が求められるか (試案)



2. 5 大切にしたいこと

- 事実にもとづく 授業の現場 学びの現場
- (できるだけ)教科の枠にとらわれない

○ 個の発達をとらえる視点

「中等教育の課題と授業分析」 名古屋大学 柴田好章

※ 本稿は、社会科の初志をつらぬく会の第48回全国大会における柴田の提案内容を修正・加筆したものである。初出は、田代裕一・柴田好章「中等教育における授業分析」（『考える子ども』No.295, 2005年8月）。

昨今、フリーターやニート、早期離職率の増加など、働くことを通じた社会参加の様相に大きな変容がみられている。これらをうけ、キャリア教育の推進が叫ばれるようになってきた。「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」の報告書¹⁾では、キャリア教育が求められる背景として、次のような課題や問題状況が挙げられている。経済のグローバル化の進展、コスト削減、経営の合理化、雇用形態等の変化、求人の著しい減少、求職と求人の不適合の拡大。②若者の勤労観、職業観の未熟さ、職業人としての基礎的資質・能力の低下等。③精神的・社会的自立の遅れ、人間関係を築くことができない、進路を選ぼうとしないなど、子どもたちの成長・発達上の課題。④高学歴社会におけるモラトリアム傾向。進学も就職もしようとしなかったり、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加。そして、報告書では、「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」ととらえている。その上で、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる」キャリア教育について、意義や内容、基本方向等が述べられている。職業教育、進路指導の枠を超える概念としてのキャリア教育である。特に中等教育において、キャリア教育の果たす役割は重要であるといえる。

ところで、上記のような問題状況は、生きにくい現代を生きている子どもや若者の様子を想起させる。先行きが不透明であり、それによってもたらされる将来への漠然とした不安が支配する。こうした重苦しい雰囲気の中で、本音での人との関わりをさげ、居場所をさがしてさまよう姿。かといって絶望的な状況にあるわけではなく、幸い(?)切迫した生活上の課題(端的に言えば、明日の衣食の心配)もなく、必死になって今日を生き抜こうという活気もみられない。

こうした感覚は、意識的にしろ無意識的にしろ、かなり共有されていると思う。「がんばれば、豊かな世の中になり、自分の生活もよくなるはず」と信じ

ることのできた、上の世代からみれば、なぜ若者なのに活気がないのかは理解に苦しむことかも知れない。「がんばっても、たかが知れているし、がんばらなくても、食べていけないことはない」現在を生きざるをえない若者に、理解を示したとしても、同情することが精一杯かもしれない。昔に比べて「弱い若者」、あるいは「かわいそうな若者」というとらえ方である。

社会の変動によって、子ども、若者の位置付けも変わるのであり、それに応じた教育を展開することは、言うまでもなく重要なことである。現代社会の特質をふまえて、教育の内容と方法を構想する必要がある。その子がその子らしく生きるための教育を行うためには、その子がどんな時代に生きているのかを、十分に視野に入れなければならない。今、生き方への関心を高める教育が求められるのは、そのためである。

とはいえ、「弱い若者」、「かわいそうな若者」というような「ひ弱な」イメージでとらえきれぬのだろうか。先の報告書は、その文書の性格上、一人一人の具体的な生きる姿が記述されているわけではないが、働くことや生きることへの子どもの関心や、潜在的な資質・能力について触れ、今後の教育に可能性を見いだしている。

「各種報告等では、人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定できない、自己肯定感を持ってない、将来に希望を持つことができない、進路を選ぼうとしない等々といった子どもたちが増えつつあることが指摘されているが、これらは子どもたちの成長・発達上の課題が相当に根深く深刻なものであることをうかがわせるものであろう。

しかし、その一方、働くことや生きることに対する子どもたちの関心や意欲は低下しておらず、潜在的な資質・能力が高いことを裏付ける事例も少なからず見受けられる。適切な機会や場が提供され、指導内容や方法等に工夫がなされれば、子どもたちの豊かな可能性は、予想以上に大きく開かれるに違いない。」

また、田中孝彦²⁾は、1990年代の初頭から21世紀初頭にかけての10年の、少年による凶悪犯罪や「不登校」、「高校中退」、「ひきこもり」、「学級崩壊」など、「人間形成の「危機」を感じさせる現象・問題・事件」の拡大に対して、以下のように述べている。「私は、できる限り子どもの傍に身を置いて仕事をしようとしてきた者の一人として、この十年を、人間形成の「危機」を実感させる出来事が子どもの世界に広がった時期と特徴づけるだけではすまないように感じている。この十年は(中略)、同時に、それらをもきっかけにして、生命について、自分の生き方について、自分が生きる舞台となる日本や世界や地球のあり方について考えようとする子どもたちの発言や行動が、日本の社会の表面に浮かび上がってきた時期でもあった」。そして、こうした「生き

方を問う子どもたち」の姿を著書の中で描いている。いうまでもなく、子どもは「白紙」ではなく、「つめこみ」や「教えこみ」の教育が成立しないのと同様に、「生き方への関心」が無ということもあり得ず、また外部からこれを注ぎ込むこともできない。事象や人々と関わり、切実な問題として追究する中で、自らの生き方への関心も、自ずと高まっていくのである。つまり、今ここでこれを追究せずにいられない自己に出会うことによって、自分は何をしたいのか、何をすべきなのか、どう生きたらよいかを考えることができるのである。こうした授業を構想するにあたっては、「ひ弱な」子ども・若者という見方ではなく、すでに一人一人が、それぞれの場所で、自分なりの生き方をしようとしているを始点とすべきである。フリーターや、早期離職、転職を繰り返す若者の生き方も、一つの会社にしがみつき、あげくリストラによって生き甲斐まで見失うような生き方を意図的に拒否し、したたかでしなやかな生き方を探る動きかもしれない。

ここで、あらためて、社会科の初志をつらぬく会がめざしている問題解決学習の意義を確認しておきたい。「今日、社会は激動し困難な課題に満ちています。そのような社会にあって、社会のよりよき変化を求めて創造的に生きる力を育てようとするれば、子どもの切実な関心と強靱な意思にもとづく主体的な問題解決学習の重要性がますます大きな意義をもつに違いないと確信し、次のことをめざします。(以下略)」³⁾

その子がその子らしく生きること、学校で学んでいることを切り離さず、ぎりぎりまでそのつながりを求めていこうとすることを大切にするためには、真に深い子ども理解が欠かせない。このために、社会科の初志をつらぬく会を中心に進められてきた授業分析に、大きな可能性が見いだせるのである。抽出児童・生徒に、教師が願いをかけ、学習の中でどう変化があるのかを、徹底的に資料に基づいて追究する。そうした中から、その子にとっての本当の願いや、発達の方向性や可能性が明らかになる。これまで中等教育段階では、それほど活発に授業分析が行われてこなかったが、今後の重要な研究課題である。

- 1) 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書 ~児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために~」2004年
- 2) 田中孝彦「生き方を問う子どもたち」岩波書店 2003年
- 3) 社会科の初志をつらぬく会「わたくしたちの主張」